



『風の中のヒルクライム』 加部 鈴子/作 岩崎書店

六人の目線で書かれた笠城山ヒルクライムレース。20 km、標高差 1200 mに折り込まれた青春ドラマです。誕生日に頼んでもいないロードバイクを貰い、わだかまりを持ったまま父とヒルクライムレースに参加した涼太。去年のリベンジを誓う俊介。学ランママチャリで疾走する謎の高校生など。レース中に他の人の思いに触れたり、アクシデントに見舞われたりするうちに、いろいろ気づきが訪れる爽やかなスポーツもの。さあ、自転車に乗って走り出しましょう。



『みつばち高校生』 森山 あみ/著 リンデン舎

部活小説は数々あれど、この本はノンフィクション。就業体験で養蜂と出合った女子高生がたったひとりで「養蜂部」を立ち上げた。顧問の先生の指導のもと、仲間たちと養蜂を通じて地域交流の輪を広げていった彼ら。やがて富士見高校養蜂部は、創部 3 年で農業甲子園で優勝するまでになる。みなさんも中学時代、そしてこれからの高校時代にスポーツでも芸術でも情熱を燃やせる何かに出合えるといいですね。



『もしもあの動物と暮らしたら!?' 小菅 正夫/著 新星出版社

世界一足の速いチーターは、なぜ狩りに失敗するの? ……実はチーターは足はすご〜く早いのに、長距離は苦手なんです。カピバラは、動物界きつてのイクメン! ? など、おなじみのあの動物たちのあれやこれがわかつちやいます。実際におうちに迎える時の注意点がまじめに丁寧に書かれているので動物を飼うことの難しさもわかります。実際に飼う時に向けてシミュレーションしてみましょう。



『レモンケーキの独特なさびしさ』 エミー・ベンダー/著 管 啓次郎/訳 KADOKAWA

9歳の誕生日、母が作ってくれたレモンケーキを、ローズは食べることができませんでした。そのケーキのひどい味は、母の感情の味。以来、物を食べるとそれを作った人の感情が分かっちゃうローズ。家族は不安定で、母は秘密を持ち、父は無関心、兄は壊れそう…。ローズは自分の能力に苦しみ、誰とも共有できない世界のなかで、傷つきながらも成長していきます。息苦しさや、世界との違和感を抱えて生きている人に、静かに届く物語です。



『陸王』 池井戸 潤/著 集英社

創業100年の老舗足袋業者「こはぜ屋」。従業員27名を抱える社長の宮沢は、年々減少する売り上げに頭を悩ませていた。ある日、宮沢はふとしたことから新たな事業計画を思いつく。長年培ってきた足袋業者のノウハウを生かしたランニングシューズを開発してはどうか? 早速、社内にプロジェクトチームを立ち上げ、開発に着手するが、その前には様々な壁が立ちはだかる――。

チームワーク、ものづくりへの情熱、そして仲間との熱い結びつきで難局に立ち向かっていく零細企業・こはぜ屋の挑戦ストーリー。読み始めたら、ドキドキ、ワクワクしながら一気にラストまでやめられません。もちろん、おなじみ・池井戸流の「弱者が強者にギャフンと言わせる」痛快さもありますよ。読み応えたっぷりのおススメ本です。



『僕が愛したすべての君へ』 乙野 四方字 /著 早川書房

人々は少しだけ違う並行世界を、日常的にしかも無意識に移動しているらしい。昨日まで口も利かなかったクラスメイトが、突然自分の恋人だと話し始める。学校で孤立する暦(こよみ)の前に現れたのは、遠い並行世界から来たという性格も人間関係も大きく違った和音(かずね)だった。自分の意思だけでは戻ることが出来ない和音。暦は和音を救えるか。別巻の『君を愛したひとりの僕へ』と内容がリンクする。両方読むと解ける謎がある。

『ひとりではじめてアフリカボランティア』

栗山 さやか/著 金の星社



短大を卒業して渋谷の109で働いていた作者が、親友の死をきっかけに、アジア、ヨーロッパ、中東と約60か国をまわり、最後にたどり着いたのが、アフリカのモザンビーク。

毎日のように、たくさんの人たちが貧しさや病気で苦しみ、死んでいく現実を目の当たりにした彼女は、「こんな私でも何かの役に立ちたい！」と女性や子どもを支援する協会「アシャンテママ」をたった一人で設立。そして猛勉強の末、医療技術師の資格も取得した。目の前で苦しむ友達を助けたいという一心で、ひたむきにとりくむ彼女の姿は、現地の人たちの心を動かしていく。

簡潔な文章で、読書が苦手な人にも読みやすいと思います。ぜひ多くの人に読んでほしい1冊です。

『もっと知りたい！話したい！セクシュアルマイノリティ』1～3

日高 庸晴/著 サカイビー/イラスト 汐文社



セクシュアルマイノリティとは「性的少数者」のことで、多様な性の頭文字をとってLGBT(LGBTQ)と表現されることもあります。現在日本では、学校のクラスに1人はいると考えられており、実は身近な存在です。『すべての人が、自分の性について自分らしい表現で誇りを持ち、自分の望むように生きる権利がある』これがこの本からのメッセージです。「違い」で自分を責めたり、他人を差別しないために、多様な性についてまず知識を得ましょう。たくさんの方が理解することで、より多くの方が住みやすい世界が生まれるのです。

『オチケン！』 大倉 崇裕/作 理論社



一浪を経て入った大学は志望校ではなく、良家子女の多い伝統校だった。それだけでもなじめるのか不安だったのに、偶然出会った岸から「君でいいや」と言われ、何やら落研(落語研究会)に入部するはめになった越智健一。まったく、落語のことなんて何も知らないというのに、風変わりな二人の先輩たちに振り回され、予想もしていなかったキャンパスライフが始まる。抱腹絶倒の中篇を二篇収録した、連作落語ミステリー。

このブックリストは、所沢市立向陽中学校学校司書、所沢市立美原中学校学校司書、所沢市立所沢図書館新所沢分館司書が

選んだ **中学生のみなさんへ今おすすめする本のリスト**です！

気になる本をみつけたら、ぜひ学校図書館、市立図書館に足を運んでみてください。お待ちしております！！

Zelkova[ゼルコバ]作成委員会 2016/10/15 発行



『給食のおにいさん』 遠藤 彩見/著 幻冬舎

数々の料理コンクールで優勝するほどの腕前を持つ佐々目(ささめ)は大の子供嫌い。自分の店が焼けてしまい、生活のためにやむなく給食の調理員になった。給食なんかじゃ自慢の腕は振るえないと投げやりな気持ちで始めたものの、お困り生徒を相手にいつの間にか熱くなってゆく。「お前ら、口開けて待ってる！」大人になりきれない料理人が給食を通じて子供たちと格闘する、笑いの中にじんわりとスパイスの効いた小説。続編に『進級』『卒業』『受験』『浪人』。



『みえない雲』

グードルン・パウゼヴァング/著 高田 ゆみ子/訳 小学館

ヤンナーベルタはドイツに住む十四歳の少女。ある日、原発事故が起こり町はパニックに陥る。両親不在の中、彼女は弟と自転車で避難しようと決心する。二人は畑道を必死で走るが、「みえない雲」がみるみる迫ってきて…。家族は再会することができるのか。ドイツで教科書に掲載され、長く読み継がれている物語。エネルギー問題について改めて考え直すきっかけにもなる一冊である。



『戦争と平和』

ブリジット・ラベ/著 ミシェル・ピュエシュ/著 西川 葉澄/訳 汐文社

たくさんの戦争が起きていて、人間が争っていなかった時代はとても短い。よく考えてみると、大変な世界に私たちは生まれてきています。それでも、私たちが日常を過ごせるのは、「平和」であるための努力をしている人たちがいるからだ、とこの本は教えてくれます。同時に、「物事を考えるってどういうこと？」「自分の意見ってどう言えばいいんだろう？」という話し合いの技術について知ることができる一冊です。

『音のない世界と音のある世界をつなぐ』 松森 果林/著 岩波書店



『あなたは、音のない世界を具体的に想像できますか？ 玄関のチャイム、救急車のサイレン、電車内のアナウンス、火災報知機の音…声や音で情報を知らせる方法は日常生活の中でたくさんありますが、視覚で情報を知らせる方法はそれに比べてかなり少ないのです。「バリアのない社会をつくりたい」10代で失聴した著者は、自身の経験を活かしながらユニバーサルデザインに情熱をそそいでいきます。困難にぶつかったときも不満をぶつけるのではなく、どうしたら良くなるのかを考え、提案していく著者の前向きな姿勢が魅力的です。』